

<特集 EICA15周年を迎えて>

EICA 環境システム計測制御学会
会長 松井三郎(京都大学 教授)



日本と世界の環境ビジネスに関する状況に変化が起こっている。英国のサッチャー政権が1980年末に始めた、公共組織の民営化が日本に及び、水道、下水道事業に大きな変動が始まった。英国モデルの民営化は、鉄道、水道、下水道、都市廃棄物事業、刑務所、鉱山活動その他の事業にも広がり、英国では成功と見られる分野がある一方、経済不況克服を目指したアルゼンチンで早速導入されたが、アルゼンチンは失敗に終わった。カナダ政府も、90年代に財政悪化を建て直すため、政府組織の大幅なスリム化を実施し、一部の国立研究所を民間企業に譲渡するなどを含めた、地方公営活動の民営化の結果、政府地方自治体財政の改善が見られている。カナダにおける成功の現われとして、年金制度安定化が指摘される。アメリカは州によって違いがあるが、早くから地方公営企業運営をアウトソーシングする方法で、民営化を実施している。オリンピックを開催したアトランタ市が、水道下水道で実施している。シアトル広域圏では、流域管理の立場から水道下水道事業が導入され、自治体連携が成功例とされている。その経験を持った人物としてIWA(国際水協会)はポール・ライター氏を専務理事に採用した。

小泉構造改革路線は、現在安倍政権に引き継がれ、郵便事業の完全民営化が進行している。環境ビジネスの根幹である、水道、下水道、廃棄物事業をどのように民営化するかが、日本の今後の大きな課題となっている。とりわけEICA活動にとって関心のある、英国の水道、下水道運営体の流域単位の統合とその組織の民営化は、注意深く情報を収集する必要がある。水管理の合理性から流域全体の水の流れを管理する英国モデルは、最も先進的な改革である。日本の特殊性は、水道事業が老朽施設の設備更新、高度化を求めている状況にある一方、下水道事業は建設時代を続行しつつ、老朽施設の設備更新をそろそろ始める状況で、二つの事業の歴史的発展段階の時間差(約15年)にある。このことから、英国モデルのように両事業の一体化を早急に進めることが、しばらくは困難であると予想される。

英国モデルを実施しているオーストラリアでは、地方毎に民営化の実態が異なっている。水道、下水道と都市廃棄物事業を含めて、複数の事業が一つの民間企業に運営を任せる形態も実現している。ドイツでは、水道とガス事業が自治体の運営になっているところもあり、民営化

のあり方は、エネルギー問題とリンクすることから、その様などころでは簡単ではない。しかし流域単位の水道、下水道、発電を運営しているルール川流域公社が1910年頃から存在する。スウェーデンでは、90年始めにストックホルム市とその周辺都市が出資し、ストックホルムウォーター社を設立し、民営化を実施している。その活動の一部として毎夏開催されるストックホルム水会議とストックホルム水賞授与活動を支えている。英国モデルを、最初に引き受けた民間企業は、フランスのヴェオリア社である。フランス資本とイギリス資本でテムズ流域にある水道下水道運営体を一体化している。ヴェオリア社はその後、テムズ社と連携・分担しジャカルタ、マニラ、ブエノスアイレス、マカオ等の都市水道事業を引き受けたが、途上国の事業は必ずしも黒字経営ではない。現在は活動範囲をさらに広げ、中国、インド、日本にも進出している。ヴェオリア社やスエズ社のような国際的水民間企業は、日本や他の先進国に進出する手段として、ISO活動に民営化事業の運営性能指標の導入を成功させ、日本もそれに同調参加した。ISO活動自身は、民間活動であるにもかかわらず、国際活動標準になって、国際競争の手段にもなっている。しかしアメリカは必ずしもISO活動をそのまま受け入れているわけではない。

日本モデルは、完全民営化ではなく「公設民営」の内容を自治体の歴史的事情に合わせて、公の責任範囲と民営の分担範囲を明確化するところにある。ヴェオリア社やスエズ社が活動の本拠とするフランスでは、「公設民営」を実施しており、英国モデルの完全民営化モデルではない。フランスモデルでは契約内容が重要で、そのことをコンセッションと呼んでいる。フランスの実態も調査解析が必要である。日本モデルが、他の国と異なる重要な点は、地震時対応と復旧活動の責任と分担範囲を明確にすることである。この点は、地震のあるシアトル市の事例を参考にすることができるかもしれない。

EICA研究活動の中に、フランスモデルのコンセッションやシアトルモデルを参考にしつつ、日本モデルの構築を図る必要がでてきた。EICAに結集した技術者は、コンセッションの内容の根幹となる水道、下水道、廃棄物処理システムの監視、自動制御、管理、経営の情報化と効率改善の基礎となる技術開発を行っている。EICAは15周年を、このような時代背景のもとに、新たな挑戦課題を持って迎えることになった。

EICA 設立の経緯と活動記録

第 1 回国内ワークショップ 1980 年

水質汚濁防止の整備が進む中で、下 wastewater 処理の制御公共水域の水質監視をめぐる科学技術の課題は高度化し、特に測定及び制御機器とそれらのシステムに重要な役割が求められる中、1977 年には国際水質汚濁研究会 (IAWPRC (現・IAWQ)) が「下 wastewater 処理の自動制御と水質の計測監視に関するワークショップ」を開催し、日本からの発表参加も望まれた。これらの背景から国際ワークショップのプレ会議として、運営委員会が組織され、1980 年 10 月に第 1 回国内ワークショップが「下 wastewater 処理の自動制御と水質の計測監視に関するワークショップ」として大阪科学技術センターで開催された。

特別講演として「下水処理の自動制御の現状と今後の課題」日本下水道事業団東京支社 次長 小沢勇太郎氏を講師にお招きした。同ワークショップでは、本分野へ関心が高まる中 49 編の発表がなされ、130 名の参加者を得た。

翌年のミュンヘン工科大学での国際会議には日本から 40 名余りが参加した。

第 2 回国内ワークショップ 1984 年

計測・制御・コンピュータ技術は急速に進歩し、各種産業の自動化高速化を促し産業構造の変革期にあり、上水・下水分野への参入も多く見られた。

第 2 回ワークショップは、昭和 59 年 5 月 30・31 日に大阪市立労働会館で開催された。上水の分野を加え「水システム自動計測制御ワークショップ」として 54 編の研究発表が行われ約 200 名の参加を得、熱心な討論がなされた。

1984 年 4 月にアメリカ デンバー・ヒューストンで開催された第 4 回 IAWQ ICA 国際会議は、国内ワークショップの討議を踏まえた意義深い会議となった。

第 3 回国内ワークショップ 1989 年 と「EICA 環境システム計測制御自動化研究会」の設立

IAWQ 国際水質汚濁研究会は 1990 年に第 15 回国際会議を日本で開催することを決定した。それに伴い専門家グループ「ICA」(Instrumentation , Control and Automation) は、各国からの強い要請により同時期に日本での第 5 回 IAWQ ICA 国際会議を横浜市と京都市で開催することを決定した。

その前年の 1989 年、昭和 64 年 10 月 26・27 日に京都平安会館で「第 3 回水システム自動計測制御国内ワークショップ」が開催された。同ワークショップには、Dr. Bruce E. Jank, Dr. John F. Andrews, Dr. Carmen F. Guarino, Dr. Ronald Briggs, Dr. -Ing J. H. Lohmann, Dr. Gustaf Olsson ら各国のプログラム委員による特別講演も行われ、70 編の研究発表と約 230 名の参加者を得た。これらの諸会議の成功は、国際会議成功へと重要な役割を果たし日本が国際的に果たすべき役割の大きさを内外に示した。

この国際会議開催を契機として、継続的な研究会組織の設立に向けて準備委員会が発足し、翌 1991 年この分野の研究者を結集した「EICA 環境システム計測制御自動化研究会」が組織された。

第 4 回国内ワークショップ 1992 年

平成 4 年 9 月 3 日・4 日に横浜開港記念会館で開催したワークショップでは、特別講演として「わが国の下水道の発展と今後の展望」日本下水道事業団理事長 中本 至氏、「小規模汚水処理技術の現状と今後」日本環境整備教育センター環境研究部長 大森 英昭氏を講師にお招きし開催された。

論文発表は、従来の水分野に加え、汚泥廃棄物処理・環境情報のセッションを新たに設置し、「環境システム自動計測制御国内ワークショップ」としてより広範な研究者の結集のもと、発表件数 80 編 参加者 250 名と充実した研究発表の場となった。翌年のカナダ バンフでの第 6 回 IAWQ ICA 国際会議には、このワークショップで発表された日本の研究論文が多数発表された。

第 1 回 EICA リレー研究発表会 1993 年

本会の活動を広く国内に広めようと、隔年で各地方都市をまわり研究発表会を開催することとなった。

第 1 回を平成 5 年 11 月 11 日、KKR 広島市にて開催。「水処理管理者のための自動計測技術の動向」と題して、近畿大学工学部教授・EICA 副会長 砂原広志氏の基調講演が行われた。

研究・討論として「大田川シアン流出とその対策」広島市水道局 広田忠彦 氏、「広島県の下水処理の現状と将来計画」広島県土木建築部 吉原 寛氏、「既設処理場における嫌気・好気の試行」山口県新南陽市 中司哲郎氏、他 3 編の発表が行われた。

また、「水道管理 自動計測技術の今後について」と題してパネルディスカッションが行われた。パネラーは、京都大学(平岡正勝氏 工学部教授・EICA 会長)、いわき明星大学(大音 透氏 理工学部教授・EICA 副会長)、近畿大学(砂原広志氏 工学部教授・EICA 副会長)、京都大学(津村和志氏 工学部助手・EICA 事務局長)、広島市(広田忠彦氏 水道局配水部水質管理課長)、日立製作所(馬場研二氏 環境技術研究センター室長)、電気化学計器(森 正樹氏 専務取締役)。参加者 66 名旺盛な討議が展開された。翌 12 日はマツダ本社工場・宮島下水処理場の見学会を行った。

第5回国内ワークショップ 1994年

第1回～第3回までは、4年に一度の開催であったが、研究分野がダイナミックに変化していく状況を受け、2年に一度の開催となった。

第5回という節目を迎え、平成6年9月8・9日に京都リサーチパークで開催したワークショップでは、平岡会長による特別記念講演「地球環境技術(エコ・テクノロジー)とシステム開発の動向」が行われた。

また、「未来型下水道」と題し、パネラーとして大阪府(座長:土木村淳弘氏 木部副理事長)、東京都(曾我部博氏 下水道局流域下水道本部長)、大阪市(結城庸介氏 下水道局技術監)、神戸市(斎藤 彬氏 下水道局長)、京都市(酒井和博氏 下水道局管路部計画課長)、滋賀県(中村栄一氏 土木部下水道計画課長)を迎え、各自自治体の取り組みの報告とパネルディスカッションが行われた。

また、論文発表では、新たに情報処理分野を加え12セッションの各会場では討議の充実を図る運営に努力し、発表件数60編参加者250名の充実した研究発表の場となった。

第2回 EICA リレー研究発表会 1995年

平成7年11月16日、名古屋メルパルクにて開催。

愛知県企業庁水道部長 黒田節男氏、名古屋市下水道局次長 前橋隆介氏を来賓に迎え、「高度情報管理システム」と題して、基調講演 名古屋大学大学院国際開発研究科科長 森嶋 昭夫氏、愛知県企業庁水道部水道計画課主幹 齊藤真 氏と名古屋市下水道局計画課長 大脇英樹氏を講師として開催された。論文発表4編と津村事務局よりIAWQの活動報告が行われた。研究会参加者94名、見学会参加者55名で旺盛な討議が展開された。

翌17日はトヨタ産業技術記念館・宝神処理場の見学会を行った。

第6回 EICA 研究発表会 1996年 及び「EICA 環境システム計測制御学会」への名称変更

平成8年5月総会で、会の名称が「EICA 環境システム計測制御学会」と変更され、初めての開催となり、より一層充実した研究発表の場をめざし、開催名称が「ワークショップ」から「EICA 研究発表会」と改められた。

平成8年9月26・27日横浜市技能文化会館で開催された研究発表会には、開催地より横浜市水道事業管理者 白濱栄一氏を来賓に迎え、「21世紀の水と食料」と題して、日本水道工業団体連合会専務理事 杉戸大作氏の基調講演が行われた。

また、「高度情報化社会と水環境」と題して、環境庁(座長:八木美雄氏 水質保全局企画調査官)、東京都(中里卓治氏 下水道局計画部技術開発課長)、大垣市(土屋雅敏氏 水道部下水道課主幹)、横浜市(香林仁司氏 下水道局総務部経営企画課長)、横須賀市(城内三郎氏 水道局給水部水質課長)よりパネラーを迎え、各自自治体の取り組みの報告とパネルディスカッションが行われた。

論文発表では、新たに都市ゴミ分野を加え15セッションの各会場で旺盛な討議が展開された。

翌年のIAWQ国際会議へのプレワークショップにふさわしく、発表件数は過去最高の69編 参加者300名の充実した研究発表の場となった。

イギリス ブライトンでの第7回IAWQ ICA国際会議には、この研究発表会で発表された日本の研究論文が多数発表された。氷川丸で開催された懇親会には、横浜市下水道局長 安久津 越氏に来賓としてご出席いただき交流を深めた。

第3回 EICA リレー研究発表会 1997年

平成9年9月11日、北海道大学 学術交流会館 小講堂にて開催。北海道大学 総長 丹保 憲仁 氏を来賓に迎え、基調講演 北海道大学都市環境工学専攻教授 渡辺 義公 氏、北海道庁環境生活部環境室 室長 小笠原 紘一 氏と札幌市下水道局 局長 島田 一功 氏を講師にお招きして開催された。

また、「高度情報管理システム」と題して7編の論文発表が行われた。

翌12日は北海道大学高度処理実験プラントを中心に見学会を行った。研究会参加者130名、見学会参加者38名で旺盛な討議が展開された。

第7回 EICA 研究発表会 1998年

平成10年10月22・23日神戸市産業振興センターで開催された研究発表会には、開催地より神戸市水道事業管理者兼水道局長 小倉 晋氏より来賓挨拶をいただき、『「ライフラインの機能確保と震災復興」～地震に強いライフラインを目指して～』と題して、神戸大学工学部建設学科教授 高田至郎氏の基調講演が行われた。

また、「ライフラインの機能確保と震災復興」と題し、パネラーに神戸大学(座長:高田至郎氏 工学部建設学科教授)、建設省(安倍保博氏 近畿地方建設局道路管理課長)、神戸市(松下 眞氏 水道局計画課係長)、神戸市(畑 恵介氏 建設局下水道河川部計画課係長)、NTT(中野雅弘氏 関西法人営業本部地域開発推進部長)を迎え、パネルディスカッションが行われた。

翌年のIAWQ国際会議へのプレワークショップにふさわしく、発表件数は過去最高の73編 参加者277名の充実した研究発表

表の場となり、新たに大気分野を加え 20 セッションの各会場で旺盛な討議が展開された。

神戸メリケンパーク オリエンタルホテルで開催された懇親会には、神戸市水道事業管理者兼水道局長 小倉 晋氏に来賓としてご出席いただき交流を深めた。

EICA 日本学術会議 学術研究団体に登録される 1999 年

これまでの研究発表会の開催、学会誌の発行等の活動が認められ、平成 11 年 9 月 14 日付けで、日本学術会議法(昭和 23 年法律第 121 号)第 18 条第 3 項に基づき、学術登録団体に登録された。関連研究連絡委員会は、「自動制御」。構成員数 560 名。

第 11 回環境システム計測制御(EICA)研究発表会 1999 年

平成 11 年 9 月 30 日、これまでの“リレー研究会”を含め、通算 11 回目の研究発表会として開催名称を「第 11 回環境システム計測制御(EICA)研究発表会」と改め、仙台市東北大学 良陵会館での開催となった。

基調講演「新世代型低負荷環境保全技術による廃棄物のエネルギー化・再資源化」東北大学大学院工学研究科 教授 野池達也氏、「下水道と水環境・次世紀へ向けての新たな展開」建設省東北地方建設局企画部長 谷戸善彦氏と『仙台「くらしと水」昨日、今日、明日』仙台市下水道局技監 櫻井克信氏を講師にお招きし、その後 2 セッション 7 編の論文発表が行われた。

翌 10 月 1 日は仙台市水道記念館・東北電力仙台火力発電所の見学会を行った。研究会参加者 130 名、見学会参加者 45 名で旺盛な討議が展開された。

第 12 回環境システム計測制御(EICA)研究発表会 2000 年

平成 12 年 10 月 5・6 日川崎市産業振興会館で開催された研究発表会には、開催地より川崎市水道事業管理者兼水道局長 井上裕幸氏より来賓挨拶をいただき、「環境ホルモン問題とこれからの水処理」と題して、本会副会長 松井三郎教授(京都大学大学院工学研究科附属環境質制御研究センター長)の基調講演が行われた。

また、「PRTR 法施行に伴う微量化学物質の計測とコントロール(大気・水・廃棄物)」と題し、座長 松井三郎氏 京都大学教授、パネラーとして建設省(田中宏明氏 土木研究所下水道部水質研究室長)、川崎市(鈴木 茂氏 環境局公害部化学物質担当副主幹)、化学品安全管理研究所(大島輝夫氏 同所長)、㈱日立製作所(久本泰秀氏 計測器グループ参事・日本分析機器工業会技術委員長)を迎え、パネルディスカッションが行われた。

発表件数は 69 編 参加者 341 名の充実した研究発表の場となり、16 セッションの各会場で旺盛な討議が展開された。

川崎日航ホテルで開催された懇親会には、川崎市水道事業管理者兼水道局長 井上裕幸氏、川崎市建設局長 引野 憲治氏に来賓としてご出席いただき交流を深めた。

第 13 回環境システム計測制御(EICA)研究発表会 2001 年

平成 13 年 11 月 11 日九州大学 中央図書館視聴覚ホールで開催された研究発表会には、「インカ帝国と水道 - マチュピチュの例 -」と題して、九州大学大学院教授 工学博士 楠田哲也氏の基調講演が行われた。

続いて「河川と下水道」福岡県土木部次長 飯田徹男 氏と「福岡市のごみ問題について」福岡市環境局施設部長 平尾 実氏を講師にお招きし、その後 2 セッション 6 編の論文発表が行われた。

翌 11 月 12 日は北九州エコタウン・安川電機 黒崎本社ロボット工場の見学会を行った。研究会参加者 140 名、見学会参加者 50 名で旺盛な討議が展開された。

第 14 回環境システム計測制御(EICA)研究発表会 2002 年

平成 14 年 10 月 31・11 月 1 日大津市 ピアザ淡海で開催された研究発表会には、開催地より滋賀県琵琶湖環境部長 緒方俊則氏より来賓挨拶をいただき、「水環境におけるリスクの把握と対応」と題して、東京大学大学院工学系研究科長・工学部長 大垣 眞一郎氏の基調講演が行われた。

また、「水循環における計測と制御 - 淀川水系を例として -」と題し、座長 松井三郎氏 本会会長 京都大学教授、パネラーとして国土交通省(坪香 伸氏 近畿地方整備局河川部長)、琵琶湖淀川水質保全機構(大槻 均氏 学術委員・国土環境(株)技術顧問)、大阪市水道局(小笹 泰氏 技術監兼工務部水質試験所長)、琵琶湖研究所(中村正久氏 所長)、㈱日立製作所(依田幹雄氏 情報制御システム事業部チーフエンジニア)を迎え、パネルディスカッションが行われた。発表件数は 62 編 参加者 285 名の充実した研究発表の場となり、16 セッションの各会場で旺盛な討議が展開された。

ホテルピアザ 6F クリスタルで開催された懇親会には、滋賀県琵琶湖環境部長 緒方 俊則氏 滋賀県土木交通部長 栗原 秀人氏、滋賀県琵琶湖環境部下水道計画課長 加藤 裕之氏、第 3 回世界水フォーラム事務次長 遠山 正人氏に来賓としてご出席いただき交流を深めた。

第15回環境システム計測制御(EICA)研究発表会 2003年

平成15年10月9日 金沢大学工学部 秀峯会館で開催された研究発表会には、「BSE(狂牛病)対策のその後」と題して、金沢大学名誉教授 小森 友明氏の基調講演が行われた。

続いて「金沢市における下水と汚泥処理の現状」金沢市臨海水質管理センター所長 宮本伸一 氏と「平成の築城-石垣の復元」金沢大学工学部土木建設工学科 池本敏和 氏を講師にお招きし、その後2セッション6編の論文発表が行われた。セッションの最後に Professor Pusan National University IWA-ICA 2005 Chairman Dr.Changwon Kim より「IWA ICA Conference 2005 in Pusan」開催についてのご案内があった。その後2セッション7編の論文発表が行われた。

翌11月1日は食肉流通センター・あら残処理施設、能登金剛・石川県北部 RDF センター(志賀町)の見学会を行った。研究会参加者150名、見学会参加者55名で旺盛な討議が展開された。

**第16回環境システム計測制御(EICA)研究発表会
併設 IWA/ICA 国内プレ&日韓ジョイント国際ワークショップ 2004年**

平成16年9月30・10月1日横浜市 横浜市開港記念会館で開催された研究発表会には、開催地より横浜市下水道局長金子宣治氏、IWA-ICA 委員長 釜山大学校環境工学科教授 金昌元より来賓挨拶をいただき、「持続的社會における技術と社會の変貌 -水環境マネジメントを例として-」と題して、東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻教授 味埜 俊氏の基調講演が行われた。

また、「上下水道におけるシステム最適化 -広域化・統合化時代への対応-」と題し、座長 松井三郎氏 本会会長 京都大学教授、パネラーとして東京都水道局浄水部設備技術担当副参事 原島 武氏、横浜市下水道局建設部 部次長 設備課長 小浜 一好氏、(株)東芝社会システム事業部公共システム技術第二部長 加藤 孝夫氏、(財)廃棄物研究財団東京本部理事長 杉戸 大作氏を迎え、パネルディスカッションが行われた。発表件数は59編 参加者280名の充実した研究発表の場となり、16セッションの各会場で旺盛な討議が展開された。

ホテルニューグランド2F ベリー来航の間で開催された懇親会には、横浜市水道局長 金近忠彦氏よりご挨拶を、横浜市下水道局長金子宣治氏、IWA-ICA 委員長 釜山大学校環境工学科教授 金昌元に来賓としてご出席いただき交流を深めた。

第17回環境システム計測制御(EICA)研究発表会 2005年

平成17年10月20日 ば・る・るプラザ岐阜で開催された研究発表会には、「地球に優しいナノテクでつくるウェアラブル太陽電池」岐阜大学大学院工学研究科環境エネルギーシステム専攻教授 副学部長 箕浦秀樹氏、「DNA マイクロアレイを用いたPCE汚染土壌・地下水のバイオレメディエーション事前診断」岐阜大学農学部応用生物科学部 教授 高見澤一裕氏の二題の講演が行われた。また、岐阜市長 細江茂光氏より、「岐阜市の環境都市宣言」と題して特別講演をいただいた。

研究発表として、午前、一般論文/概要発表とポスターセッション14編、午後、論文・ノート(査読付)として、2セッション7編の発表が行われた。

ば・る・るプラザ岐阜 5Fで開催された懇親会には、講師の箕浦 秀樹氏、高見澤一裕氏、岐阜市長 細江茂光氏に来賓としてご出席をいただき交流を深めた。

翌10月21日は徳山ダム → 核融合科学研究所→オリベストリートの見学会を行った。研究会参加者181名、見学会参加者43名で旺盛な討議が展開された。

第18回環境システム計測制御(EICA)研究発表会 2006年

10月30日(月)・31日(火)の両日に渡り京都大学百周年時計台記念館で開催された研究発表会には、開催地より京都市公営企業管理者 上下水道局長 吉村憲次様より来賓挨拶をいただき、「化学物質管理とリスクコミュニケーション」と題して、京都大学大学院工学研究科都市環境工学専攻(専攻長) 内山巖雄教授の基調講演が行われた。

また、「環境システム計測制御に係わる安全と安心」と題し、座長 京都大学 内山巖雄教授、パネラーとして(財)大阪市下水道技術協会理事長 高柳枝直氏、(財)下水道新技術推進機構企画部長 中里卓治氏、(株)東芝水・環境システム企画部長 篠原哲哉氏、横浜国立大学名誉教授 清水久二氏を迎え、パネルディスカッションが行われた。

本研究発表会では、従来のセッションに加えて、「維持管理」セッション、また、若手技術者による「特別企画」セッション未来プロジェクト「若手技術者が描く未来環境予想図」が企画された。発表件数は58編 参加者330名の充実した研究発表の場となり、16セッションの各会場で旺盛な討議が展開された。

百周年時計台記念館2F 国際交流ホールで開催された懇親会には、京都市公営企業管理者 上下水道局長 吉村憲次氏、京都大学地球環境学大学院地球環境学堂長 嘉門 雅史よりご挨拶を、に来賓としてご出席いただき、講師の諸先生を囲み参加者との交流を深めた。同席上、表彰式が行われ、本会の発足以来、会の発展に多大な貢献をされ、本年度の総会にて副会長を退任された、京都大学 武田 信生殿 に功績賞が授与された。また、奨励論文の表彰式も行われ、6編の論文が奨励論文として選考され、松井会長より賞状と副賞が受賞者に手渡された。

'95	'96	'97	'98	'99	'00	'01	'02	'03	'04	'05	'06
7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
1 \$ 79・5円 阪神淡路大震災 地下鉄サリン事件	東証ダウ平均二万円台割れ 薬害エイズ訴訟 アトランタ五輪	大型金融倒産 秋田・長野新幹線開通 香港返還	長野五輪 明石大橋開通	JCO東海村被爆事故 しまなみ海道橋開通	シドニー五輪 有珠山噴火	アメリカ同時多発テロ 狂牛病発生	冬季ソルトレークシテイ五輪 住民基本台帳ネットワーク稼働 ユーロ圏12ヶ国でユーロが流通	東京電力原発全面停止 スペースシャトル空中分解 イラク戦争	美浜原発で蒸気噴出 アテネ五輪	新潟県中越地震 京都議定書発効	愛・地球博 JR西・福知山線列車事故
(5/26)	(5/22)	(5/15)	(5/14)	(5/14) (9/14)	(5/19)	(5/15)	(5/13)	(5/13)	(5/12)	(5/11)	(5/17)
平成七年度総会	御学会への名称変更 EICA環境システム計測制 平成八年度総会	平成九年度総会	平成十年度総会	に登録される 日本学術会議学術研究団体 平成十一年度総会	EICA設立十周年総会 平成十二年度総会	平成十三年度総会	平成十四年度総会	平成十五年度総会	平成十六年度総会	平成十七年度総会	平成十八年度総会
(1/5) (7/5)	(1/5,3/1,9/12)	(3/15) (9/11)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)	(3/15) (9/15)
EICAニュース(7)	EICA誌VOL1(1)2 EICA年報VOL3 EICAニュース(9)	EICA誌VOL1(3)4 EICA誌VOL2(1)2	EICA誌VOL2(3)4 EICA誌VOL3(1)2	EICA誌VOL3(3)4 EICA誌VOL4(1)2	EICA誌VOL4(3)4 EICA誌VOL5(1)2	EICA誌VOL5(3)4 EICA誌VOL6(1)2	EICA誌VOL6(3)4 EICA誌VOL7(1)2	EICA誌VOL7(3)4 EICA誌VOL8(1)3	EICA誌VOL8(4) EICA誌VOL9(1)3	EICA誌VOL9(4) EICA誌VOL10(1)3	EICA誌VOL10(4) EICA誌VOL11(1)2/3
(11/16-17)	(9/26-27)	(9/11-12)	(10/22-23)	(9/30-10/1)	(10/5-6)	(11/11-12)	(10/31-11/1)	(10/9-10)	(9/30-10/1)	(10/20-21)	(10/30-31)
見学・トヨタ、宝神処理場 名古屋/メルパルク名古屋 第二回リレー研究会 (3/4)	横濱/横浜技能文化会館 第六回研究発表会 (2/71)	見学・北電総研、札幌/北大学術交流会館 第三回リレー研究会 (7)	神戸/産業振興センター 第七回研究発表会 (2/73)	見学 仙台火力、水道記念館、ツカ 仙台/東北大長陵会館 第十一回研究発表会 (3/7)	川崎市/産業振興会館 第十二回研究発表会 (5/69)	安川電機黒崎本社ボルト工場 見学 北九州工科大学、 九州大学/中央図書館視聴覚ホール 第十三回研究発表会 (3/6)	大津市/ピアザ淡海 第十四回研究発表会 (6/62)	能登金剛、石川北郡(セター志賀町) 見学、食肉処理センター、あさ残処理施設、 金沢市/金沢大学工学部秀峯会館 第十五回研究発表会 (3/6)	日韓シヨイント国際フックシヨップ IWA/IICA国内プレ& 第十六回研究発表会併設 (8/59)	オリベストリート 見学 徳山ダム、核融合科学研究所 岐阜市/ばるるプラザ岐阜 第十七回研究発表会 (3/21)	時計台記念館 京都市/京大百年 第十八回研究発表会 (6/58)
(10/24~11/4)		(7/6~10)				(7/3~7)				(6/29~7/2)	
コペンハーゲン センサー特別シンポ ◎(3/0)		ブライトン・ロンドン 第七回イギリス ◎(11/6)				スウェーデン・マルメ 第二回(第八回) IWA/IICA ◎(10/5)				釜山 第一回韓国 (9/3)	



総会・講演会の記録

年度	開催日	会場	講演会
3	1991.4.9	九段会館	
4	1992.4.24	機械振興会館	
5	1993.5.12	野口英世会館	下水道事業の現状と今後の問題点 建設省下水道部長 松井大悟 氏
6	1994.5.20	ザ・フォーラム	安全でおいしい水の確保のための水運用技術のあり方 厚生省水道環境部長 藤原正弘 氏
7	1995.5.26	京橋会館	阪神・淡路大震災と水道 東京都水道局給水部長 峯尾正臣 氏 下水道地震対策技術調査委員会・第1次答申 京都大学名誉教授 平岡正勝 氏
8	1996.5.22	機械振興会館	マルチメディアの現状と将来の課題 千葉工業大学電子工学科教授 小林幸雄 氏 環境マネージメント・監査の最近の動向・目前に迫った ISO14000 シリーズの発効 日本環境認証機構代表取締役 福島 哲郎 氏
9	1997.5.15	芝 弥生会館	エネルギー関連規制緩和の国際動向と我が国の対応 東京農工大学工学部教授 柏木孝夫 氏 未来型水道へのアプローチ (財)水道技術研究センター専務理事 藤原正弘 氏
10	1998.5.14	九段会館	資源循環型社会をめざして 早稲田大学工学部教授 永田勝也 氏 世界の水道あれこれ 東洋大学工学部教授 後藤圭司 氏
11	1999.5.14	機械振興会館	廃棄物処理のアキレス腱…ダイオキシン等 国立公衆衛生院廃棄物工学部長 田中 勝 氏 下水道新技術推進機構の動きと「鷗外と下水道」などを織りまぜて (財)下水道新技術推進機構専務理事 斎藤健次郎 氏
12	2000.5.19	芝 弥生会館	新世紀の経営感覚 -環境新時代に向けて- 東京都公営企業管理者・水道局長 赤川正和 氏
13	2001.5.15	芝 弥生会館	ASPの現状と今後の展開 山梨学院大学経営情報学部 教授 松田利夫 氏 退官記念講義『大学での5年間』 豊橋技術科学大学教授 笠倉忠夫 氏
14	2002.5.13	芝 弥生会館	自動制御の歴史と医療への応用 京都大学大学院工学研究科電気工学専攻教授 荒木光彦氏 水道分野の国際協力の動向 (社)国際厚生事業団 事業部長 野崎慎仁郎氏
15	2003.5.13	芝 弥生会館	持続可能な社会へのエコ産業革命 京都大学大学院地球環境学学・学舎長(併任) 同 工学研究科環境地球工学専攻教授 内藤正明氏 上下水道事業活動 ISO規格化の動向 ISO/TC 224 下水道国内対策委員長 ㈱西原 技術顧問 京才俊則氏 (元建設省土木研究所下水道部長)
16	2004.5.12	芝 弥生会館	21世紀の水道を考える 北海道大学大学院工学研究科都市環境工学専攻 教授 眞柄 泰基 氏 三重ごみ固形燃料発電所サイロ事故について 豊橋技術科学大学技術開発センター科学技術コーディネーター 笠倉 忠夫 氏
17	2005.5.11	芝 弥生会館	嫌気性アンモニア酸化(anammox)による窒素除去 熊本大学工学部環境システム工学科教授 古川 憲治 氏 宮古島の命の源である地下水保全 ストックホルム青少年水大賞(第8回)受賞 宮古農林高等学校 教諭 前里 和洋 氏
18	2006.5.17	川崎市産業振興会館	イタリア・ポンペイ遺跡における水道の敷設と発展について (財)古代学協会 古代学研究所 助教授 坂井 聰 氏 Innovative multipurpose rainwater management in Korea using IT (韓国における IT を利用した革新的な多目的雨水管理) Professor Mooyoung Han Seoul National University